
恋姫無双～龍の如く～

bigboos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜龍の如く〜

【Nコード】

N5641Y

【作者名】

bigboos

【あらすじ】

ある日暴走車に引かれて死んでしまった鬼龍和人、目の前に爺さんが立っていて二つの選択を言われた、ここに残るか・異世界に行つてやり直すかと言われた。この話はぬらりひよんの孫×デビルメイクライ×恋姫無双・などまあ、チートを使っています

初めて書くので恋姫無双などに関して「知ったかぶってんじゃねーよ」とか思う人がいると思いますが許して下さい

第一幕 俺は・・・（前書き）

どうもbigboosです初めまして、いやゝ書くのは初めてなので応援よろしく
お願いします

第一幕
俺は・

ある日、いつもどおりに過ごしていた俺はその日

聖フランチェスカ学園から家に帰ろうとしていたところに

突然、暴走車が突っ込んで来てかわせず死んでしまった……

はじめる。

「ようやく目を覚ましたか・・まったく」

あ
ん
た
は
・
・

「ワシか？ワシはただの爺さんじゃよ」

そうか・・・で爺さんこはどこなんだ

「ここか？ここはあの世じゃ」

え・・・ええええええええええ？

うそだろ？なんで俺死んだんだよ？

「お主暴走車に引かれてしんだじやろ．．」

うーんあんまり記憶にない

「本当ならお主はあそこで死ぬはずはなかった、じゃがお主が死んだ時

本来なら輪廻の輪に戻るはずだったんじゃが、なぜか輪廻の輪から外れてしまったんじゃ（笑）」

なんでアンタ笑ってんだよ？（怒）

「まあそれはとにかく、この後お主はどうしたいんじゃ？このままここにいろか？

それとも、異世界に行ってやり直すか？お主の好きな方を選ぶんじや。」

え・・・それはここに残るのはさすがに嫌だけど、向こうの異世界に行ったら赤ん坊からやり直しなのか？ていうか異世界ってどんな世界なんだ？それによって決まるけど・・・

「ん？その世界は・・・ま行っただけのお楽しみじゃ」

うーん、どうしよう・・・

俺なりに考えたすえ、結局ここにいるのは暇だと思ったので・・・

爺さん、俺異世界に行く

「む、そうかではさっそく・・・」

ちよつとまったー？

「うお？なんじゃいきなり、大声出しおって？」

赤ん坊からって言うのはちょっと氣にくわねえな、せめて20才にしてくれ頼む？

あと何個か願いを叶えて欲しんだ

「わがままな奴じゃな・・・いいじやろ、で他になにを叶えてほしいじゃ？」

第一幕 俺は・・・（後書き）

途中で終わってしまいました、スイマセン次回は主人公がいろいろ
いると

チートのような事を言います

アドバイス宜しくお願いします

第二幕 どうしようこれから

まず一つ目はデビルメイクライ3のパージルと、服装と髪型意外は全て同じで、

二つ目は外見だけどぬらりひよんの孫に出てくるので、まあなんでもいいです

四つ目は年齢は二十歳にしてくれ、赤ん坊

の頃からって言うのはあまりにも嫌だから。五つ目は、女性に多少モデル

ぐらいにしてくれ、最後はどんな傷でも治せる薬をくれ

「うーむ、まあよいじゃろ一つ目と四つ目は叶えてやろ。二つ目じゃが外見は

なんでも良いと言ったが、本当に何でもいいんじゃない？」

ああ・・・いいけど

「うむ、分かったあとで後悔するんじゃないぞ、よいな？
五つ目は十人中七人が振りかえるぐらいでよかるう」

まあ・・・いいけど

「最後の願いじゃが、この薬を持って行くがよいどんな傷でも治せるものじゃ。

じゃが、悪しき者には使うでないぞ、いいな？」

分かった

「それでは早速異世界に送るからの、元気でのう・・・」

「おつと忘れる事じゃったお主名はなんと申す」

俺の名前は鬼龍和人、向こうの世界では結構優しかったんだぜ？

「ふむ、鬼龍和人か・・・良い名じゃ異世界でも優しい心を持つのじやぞ。」

そして、平和な世の中にするんじゃ」

そして俺は光に包まれて目の前が真っ黒になった

う・・・うーんここは・・・

目を覚ますと川に近くにいた、「ここが三国の世界か・・・

ん？何だ手紙か『鬼龍よお主がこの紙を見ているとゆうことは無事着いたようじゃな

お主がいる世界は三国の世界じゃが、ただの三国世界ではない、恋姫無双の世界じゃこの世界は

・・・とゆう感じじゃ、あと外見じゃがなんでも良いと言ったので淡島にしていたからのじゃあの』

手紙に書かれたことを理解し、立ちあがった・・・さてこれからどうしよう。

第二幕 どうしようこれから（後書き）

どうも、寒いです。今回、これからのところで終わってしまってます
イマセン

次回、鬼龍はとりあえず人に会うために歩いていると、山賊が一人
の女子を囲んでいた。鬼龍は助けようとする・・

第三幕 黒髪の女ゝ前編

俺はとりあえず人に会うために道を歩いていた

「ん？あれは・・・」

よく見ると道の端っこに三人の男とその前に一人の少女がおびえていた

『へへへ、金目の者を渡しなへへへ』

『そうだぜ速く渡しな』

『は、早くわ、渡すんだな』

なんだあいつら、人の金を奪うのか、と言う事は山賊か・・
とりあえず助けるか

「おいその人」

『ああ？なんだガキ』

ガキとは失礼な、二十歳だぞ

「その娘おびえてんだろ、離してしてやれよ」

『なんだと、部外者はどっか行けよ』

そう言いながら山賊の一人が、剣を抜いて俺にむけた

「おい、もう一度言うぞ、その娘を離してやれ」

俺はそう言いながら閻魔刀を鞘に入れたまま抜いた

『お・・なんだやるつてのか後悔すんじゃないぞ？』

ほかの二人も剣を抜いて構えた

「おい、お前らこそ後悔すんなよ？」

『し、死ぬんだな』

デブが怖そうに突っ込んでくる

はあゝめんどくせ、俺はそう思いながら閻魔刀でデブのみぞおちを叩いた

『ぐふう？』

『あ、兄貴？デブがやられた？』

『な、なんだと・・デブがやられた』

おいおい、味方のお前らまでデブって言うなよ

『つ・・？おい次お前がいけ？』

『いやっすよゝ兄貴が行けばいいじゃないですか？』

なんか、二人でもめあっているな、今のうちに・・

『ん？』

『なんだ？』

地面を蹴って、刹那の如く目にも止まらぬ速さで二人のみぞおちに、閻魔刀を入れた

『ぐふう？』

『あべしい？』

そのまま二人は気絶した、
「ふう〜あ．．大丈夫か？」

少女の所に駆け寄り声をかけると、
『あ．．ありがとう．．』

おびえた様子でこっちを見ている。山賊じゃないですよ〜

「ああ心配して、俺は山賊じゃない」

『ほ．．本当？』

「ああ、嘘はつかねえさ」

『．．．．．』

ああ〜警戒してるねえ、ままいいかおつとそれより

「あのさ、ここ近くに村とかないか？」

『あるよ、ここをまっすぐ行ったところに．．』

「そっか、ありがとう．．あ君はどこに行くの？なんなら送るけど．．」

俺がそう言つと、『私は、この先にある村に住んでる．．』
ん？じゃあ俺と向かう所か

「じゃその村まで一緒に行こうか」

『え、でも．．』

「いいって、また山賊が出たら危ないだろ？」

『うん．．』

お、村が見えたぞ。

あれから数分かかってようやく村の少し手前まで来た。

よし、あと少しで・・・と思った瞬間、横からいきなり一人の女が俺に向かつて槍のようなものを

刺してきた。

「うお？あぶねえ？」

少女を抱えて、少し後ろに下がる

「誰だ？」

閻魔刀を構えて俺がそう言うと、黒くて長い髪の女が、

「わが名は関羽？字は雲長？その娘を離せ山賊め？」

と体にまとっていた布を撮り名のつた

こいつが、関羽か・・・、男だと思ってたけど、そお言えば爺さんの手紙に

恋姫無双とか書いてあったけど、って言うか俺は山賊じゃねえー！

第三幕 黒髪の女〜前編〜（後書き）

どうも、bigboosです。今回やっと武将がでてきました
この後も楽しくしていくのでヨロシク

次回は主人公の設定を書こうとおもいます

コメント、感想お願いします

遅くなりながら、オリ主設定

主人公

鬼龍和人（二十歳）

身長：178cm

体重：75kg

体格：無駄のない体。（おもに筋肉）

容姿：心は優しい。外見はぬら孫の淡島
意外に平和主義

聖フランチェスコ学園に通っていた普通の高校生

普段は、テニスなど体を動かす事をしている

怒らせるとたとえ妖怪など、一瞬にして震えあがる

外見が淡島なので夜になると、女の姿になる。

昼は男の姿

三国志はときどきにしか、見てないのであまり詳しくない

武器

閻魔刀

デビル3に出てくるバール愛用の閻属性の日本刀。「人と魔を分かつ」とも、「閻を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀、鬼龍が使うとバールを超ええる力を出す

ベオウルフ

攻撃力があり、攻撃速度も速い。

鬼龍の場合これを使うと拳が痛い

フォースエッジ

こちらは、デビル1に出てくる。ダンテが装備しており、アミュレットがそろつと魔剣スパードになる

鬼龍はこれを危ないときや助けるときにつかう

幻影剣

魔力により出来た剣。

自分の周りや相手の周りに、設置できる。その場から直接相手に放つことができる

最大でも五人まで同時に攻撃出来る

ダークスレイヤー

敵の前方・上方・下方（地上だと後方）へ瞬時に移動し一気に間合いを詰める事ができる。移動・回避にも役立つ

鬼神の“鬼憑”完全なる父性——“伊弉諾”イザナギ”

鬼龍が男の姿の状態で閻魔刀を装備している時に発動できる
どんな相手でも一刀両断できる、そのためには「畏」を溜めて一気に放出する

この技はぬら孫の淡島ので、魅を放ち鬼の如く恐怖に落とし入れる

天女の“鬼憑”完全なる母性——“伊弉冉”イザナミ”

鬼龍が女の姿の状態で発動できる、武器は必要なく混乱している味方に対して使用する
使用すると少し疲れる

いくさおとめえんぶ
戦乙女演武

乙女のごとく艶やかな舞で翻弄する。

これも、女の姿でしかできない。

魔人化

武器はどれでもよい、男の姿でしかできない

覚醒・魔剣士スパード

鬼龍が怒りや悲しみが頂点に達した時だけに覚醒する

武器は魔剣スパード、姿は攻撃をする時だけスパードの姿になる。

常に、周りには幻影剣が配置しており、攻撃してくる敵には容赦せず、降伏する敵には

みぞおちを入れる。

背後にはイザナギの姿が見える。（なぜか・・・）

この状態の時はどんな攻撃も全く効かない。（たとえば、マグマでも、レーザーでも）

遅くなりながら、オリ主設定（後書き）

オリ主の設定は話が進むたびにたまに変わります
まあ・・あまり変わらないとおもいますが。
鬼龍は、もう最強になってると思います

次回鬼龍はいきなり出てきた関羽と戦う事に・・・

第五幕 黒髪の女と後編

愛紗

「愛紗、村はまだなのか？ 鈴々は疲れたのだ」

「私も疲れちゃったよ」

「桃香様しつかりしてください、鈴々もしつかりしろ？」

「うむ、私も少し疲れてしまった」

二人ともみつともない、おまけに星まで・・・

「朱里、雛里大丈夫か？」

「はい、私は大丈夫です」

「は、はい大丈夫でしゅ、はわわわ・・・噛んじゃった・・・」

二人は大丈夫のようだな

それから少しして、道ばたに三人の男が倒れていた。

「桃香様？ 人が倒れています？」

「え？ いつてみよう？」

急いで倒れている三人の男もとへ急ぐ

「大丈夫か？ しつかりしろ？」

「大丈夫ですか？」

『う・・・ひい？ ち、近寄るな？』

何を言っているのだこの男たちは

「落ちつけ何があつたんだ？」

星がそう聞くと

『さ、山賊が、おらの娘をさらつたんだ？』

「何だと？ それで山賊はどっちに行つたんだ」

星がきくと、『た、確か向こうの村の方に行った気がする・・・』

「村か、分かったあなたの娘を助け出そう」

『本当か？ありがとう』

「おい、愛紗その山賊の特徴をきいとかないでいいのか？」星が言う

「あ・・・そうだった、山賊はどんな姿だ？」

『腰に黒い刀をしていて、あと・・・すまん忘れてしまった』

黒い刀か・・・この国の者じゃないそうだな

「よし、星、鈴々助けにいくぞ？」

「鈴々はつかれたのだ」

「私も疲れてしまった、少し休ませてくれ」

「まったく、じゃ二人は桃香様を守りながら後からきてくれ」

そう言い残して私は一人、腰に黒い刀をさしている山賊を探しだした

はあ、はあ、どこにいる、あれからずいぶんと絶つが黒い刀を持っている

山賊はどこにもいない。

「向こうの方を探してみるか・・・」

向こうに行く途中話し声が聞こえた。

「ん？あそこにいるのは・・・」

一人の小さな少女と腰に黒い刀をさしている男がいた

「あいつか」

そのまま山賊に向かって青龍円月刀を向けた。

「うお？あぶねえ？」

相手は少女を抱えて後ろに下がった。

「誰だ？」

男が見たこともない剣を向けて行つた

「わが名は関羽字は雲長？その娘を離せ、山賊め？」

鬼龍

なんだこの女、いきなり人に槍のようなものを突き付けて、礼儀をしらねえのか

「おい、いきなり襲つてきやがつて、お前も山賊か？」

「なにを言うか、お前こそ山賊だろう？」

「・・・？、なに言つてんだよ山賊なわけねえだろ」

そう俺が言つと、「うるさい、山賊め？覚悟ー」

ブン？ ガキイン？

俺はすかさずフォースエッジに武器を変え関羽の攻撃を防ぐ

「くう・・・？何すんだよ？話をきけよ。」

「問答無用？はあああああ？」

く・・・このままじゃ、ん？そくだ・・・

・ 何だこの男、ただの山賊だと思つていたが違つ、この男はまるで・・・

よし、いまだ。

ブン？ 残像を残しながら相手の目の前に移動する

「え・・・」

そのまま、相手の足をはらった

「きゃ？」

そのまま地面に倒れこみフォースエッジ突き刺す。

「これで「まってください？」なんだ次は」

そこには五人の女が後ろに立っていた

なんだこいつら・・・

第五幕 黒髪の女〜後編〜（後書き）

どうも、やっぱり戦闘のところは書くのが難しいです。
でもまあがんばります

次回、鬼龍は誤解をやっと聞き入れてもらい、五人の女の子達と村に
目指す、しかしそこには鬼龍が倒した山賊三人組が待っていた。

第六幕 願い（前書き）

今気がついたけど第一幕以外は全部（改）になっていた（笑）
その理由は、すべて途中で作成を終えたのでまた途中から、することになったんです

第六幕 願い

鬼龍

「で、その男三人達に山賊が娘をさらったって聞いて俺を襲ったのか
「申し訳ない」

頭を下げて謝る関羽

「むやみに人の言う事をきくな」

「「「「「本当に申し訳ない（ございません？）（のだ・・・）」」」」」

他の五人も一緒に謝っていた

「あ、いやそこまでしなくてもいいから、頭上げて」

「え、あはい」

「うむ」

「お兄ちゃんは優しいのだ」

「優しい方ですね」

「本当だね」

「や、優しい人でしゅ、噛んじやった・・・」

そこまで言わなくても・・・と、そうだこの子をむらに連れて行かないと

「じゃあ、この子を村におくるから、なんならあんた達も一緒に来るか？」

「え、どうして？」

「いや別に、あんたらどこに向かってんだ？」

「あ、この先にある村に行こうとしていたんです」

村か、じゃあ俺が行くところか・・・

「じゃあ行くか？一緒に」

「え・・・でも」

何か困りごとでもあったか

「あ、いやいいんだ。無理に行かなくても」

「あの・・・？」

ん、何のようだ？

「付いて言ってもいいですか？」

「も、桃香様??」

「だって、優しそうな人なんだもん♪」

「ですが・・・？」

そうだぞ、案外平和主義なんだぞ、俺は

「ああ、いいけどその前に一つ質問していいか？」

「はい、何ですか？」

前から聞こうと思ってたけど、たしか別の名前でよんでたな

「あのさ、なんで関羽のことを、愛紗って呼んでたんだ？」

ブン? 「今の言葉を取り消せ？」

また、関羽が青龍円月刀を俺に向けて振ってきた

「あぶねえ? なにすんだよ? 俺はただ・・・」

「うるさい? 黙れ?」

ブン? ブン?

「愛紗ちゃんダメだよ? ちゃんと質問に答えないと」

「ですが、こいつは私の真名をよんだのですぞ?」

「真名? なんだそれ?」

真名と言った瞬間関羽が睨んできた。本当に知らないんだって?

「私が説明しますね♪」

“真名”は、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるのです

なるほど、それで関羽が怒ってたのか。

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね、私は劉備、字は玄德、真名は桃香だよ」よろしくね」

「桃香様??なぜ真名を教えるのですか??」

たしかに、別に教えなくてもいいのに・・・

「だって教えてもいいと思ったんだもん」

「だからといって・・・」

「皆はいいよね」

「私は・・・では一つお願いがある」

関羽の後ろにいた薄青色のした髪の女が言ってきた、なんだねがいつて?

「私と一度手合わせを願いたい、もしそなたが勝ったら真名を教えよう」

「え、だめだよそんなことしたら」

劉備が言つと、「鈴々もそれがいいのだ?」

「私もそれがいい、覚悟しろよ・・・」

関羽と鈴々とか名乗る奴に、薄青い髪をした女が言ってきた

「ああ、いいぜかかってこいよ、三人まとめて相手してやる」

「では、いざ?」

関羽の掛け声と同時に三人が走ってきた

後悔すんなよ?

第六幕 願い（後書き）

どうも、やっと出来ました。
いやあ、長かったです

第七幕 ようやく・・・

「ヤアアアアア？」ブン？サツ？

おっ、鈴々とかいう奴なかなかやるな、

「だが、まだまだあ？」

ベオウルフの籠手を装備して、鈴々にストレートを放った。

「うわああああ？」そのまま後ろに倒れこんだたん、関羽が突っ込んだ

「ハアアア？せい？」

ギイン？「痛って？」ベオウルフで関羽の攻撃を防いだけど、少し痛い。

「この？」関羽にも、ストレートを放った。

「きゃあ？」関羽はそのまま、後ろに倒れた。

「おいおい、まだ出来るだ「すきあり？」？」

くそ？よけきれない？・・・よし

「せいやあああ？」ス力、え・・・

「こつちだ。」

危なかった、もう一人いるのを忘れてた、そう思いながら薄青色の髪を持つ

相手の後ろに回り込んで、閻魔刀を突き付けた。

「くっ・・・？私の負けだ・・・」

ふうーやっと終わった、さすがに疲れたな。

「三人とも大丈夫？」

劉備が三人達に近寄り声をかける。

「あの、大丈夫ですか」

横に二人のかわいらしい少女が近寄ってきて、こっちを見ながら聞いてきた。

「え、ああ大丈夫だ、ありがとな」

二人の頭をなでてやった

「／／／い、いえ／／／」

なぜか二人の顔が赤くなった、熱でもあんのか？

「おい、約束」

そう言うつと薄青色の髪の子が立ち上がって、こっちに歩いてくる。
なんだ、殴る気か？

「私の名は超雲、字は子龍、真名は星だ」

超雲か、たしか槍の使い手だった気がする、真名は星か。

次に二人の少女がこちらを見て

「私の名前は諸葛亮、字は孔明です、真名は朱里です」

「はわわわ、私は鳳統、字は士元、真名は離里でしゅ、はわわわ囃んじやった」

小さい帽子の方が、諸葛亮で真名が朱里か、で青い帽子の方が鳳統で真名が離里か。

この二人は知ってるぞ、天才軍師だったな（確か・・・）

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ」真名は鈴々なのだ」

張飛か、確か酒が大の好きって書いてたな真名は鈴々か、自分で言っただけ。

そして、最後は関羽・・・だと思ったが気絶しているらしい、そんなに力いれたっけ？

「おい、大丈夫か？」

「うん」

反応がない、ただの屍のようだ、とそんなことより

「とりあえず関羽を村に運ぼう、そうだあんた達のことを何て呼べ

「ばいいんだ？」

劉備から「真名は愛紗ちゃん以外はみんな、あなたに教えたから真名でよんでいいよ」

「いいのか？」

「うむ、いいぞ」超雲がそう言う

「鈴々もいいのだ」

「はい、いいですよ」

「はい、いいでしゅはわわ、また噛んじゃった」

「みんながそう言うなら、あ俺の名前は・・・ま関羽が目覚めてからおしえるよ」

今教えたら混乱するからな、夜も近いし姿の事もあるからな。

「じゃ、星運ぶの手伝ってくれ、もうすぐ夜になるからな」

「うむ、わかった」

こうして俺は、桃香、鈴々、星、関羽（真名はなんか分からん）、朱里、離里達の真名をさずかった。

さて、ここに来た事情の事を村で話すとするか、ふあああ眠い。

第七幕 ようやく・・・（後書き）

どうも、前の文章が読みにくいと思ったひとがいるかもしれません
スイマセン、今回は読みやすくなっているとおもいます（たぶん）
次回鬼龍は村に着き、宿で事情をはなした、そして・・・

第八幕 真名く前編く

「村についたのだく」

あれから星に関羽を持ってもらって、村に着いた。

「ふうくやつと着きましたね」

「もう、足がガクガクだよ」

「大丈夫か？、星」

「ええ、大丈夫です、その子はどうするのです？」

あ、そうだったこの子の家はどこだろう

「自分の家は分かる？」

「う、うん分かるよ」

「じゃあ、教えてくれるか？」

そして、少女の家に着いた

「ありがとうございます、ほらちゃんとお礼を言って」

「あ、ありがとうございます」

「いや、いいんだ次から気をつけろよ」

よし、これでひとまずはいいい、「チョンチョン」誰かが背中を突っついてきた

誰だ？

「あのく一つ聞いてもいいですか？」そこには朱里と離里がいた。

「ん？どうした？」聞くと、

「今日、どこで休むんですか？」

ん？休む・・・どこで・・・考えた、そして言った。

「分かん（キツパリ）」

二人共目をキョトンとしている、いやホントどうしよ？

「あのゝ、」

「ん？はい」

「もしよければ、私たちの家で良ければ、休まれますか？」

ほ、ホントか？これはラッキー？

「いいんですかゝ」

桃香が嬉しそうに聞いている。

「ええ、いいですよ」

「ありがとうございます、あと良ければこの人も良いですか？」

星が関羽を指差して言う、「ええ、いいですよ」

「「「「「じゃあ失礼します（のだ）」「「「「「」

おおおゝつまそうな飯だ、「パク」

鈴々が先につまみ食いをした、何をする？（ムスカのように）

「鈴々ちゃん、つまみ食いはいけませんよ」朱里が鈴々を叱った
「だって、鈴々はお腹がすいたのだゝ？まだ食べちゃいけないのか

」？」

「もう少し我慢しろ、私だって我慢してるんだ」と星が言う

「私もお腹がペコペコなんです」桃香も鈴々と同じ様な事を言う

たしかに俺も腹がへったな

「おまたせしました、えんりょうなく食べて下さい」

「あ、どうもじゃ」「」「」「いただきま〜す？」「」「って早？」

さすがに俺と星はすぐには食べなかった、だってまだ名前聞いてねえもん

「あの〜お名前は・・・」

あ、向こうから聞いて来てくれたありがたい。

「私は超雲、字は子龍、真名は星だ、よろしく」

「あ、私は劉備、字は玄德、真名は桃香だよ」

「はわわわ、私は鳳統、字は士元です、真名は離里です」

今回は噛まなかったな。

「鈴々は、張飛、字は翼徳なのだ〜真名は鈴々なのだ〜」

「私は諸葛亮、字は孔明です、真名は朱里です、宜しく願いします」

「星さんに、桃香さん、鈴々ちゃん、離里ちゃん、朱里ちゃんですね、私は南葉といいます」

この子は凜と言います」

「よろしくね、凜ちゃん」

「／／／は、はい／／／」ちよつと照れくさそうにしながら言った。

「で、あなたのお名前は？」

「あ、俺は・・・後で皆が集まった時に言います」

それから数分後、奥の部屋から関羽が顔を出した、

「なにやら騒がしいですね」

「あ、愛紗ちゃんやっと起きたよ」

もう腹いっぱいだ、ゲップ

「いっぱい食べたのだよ」

「うむ、これ以上は食べれないな」

「おいしかったです」

「おいしかったですね」

「お、関羽やっと起きたか」

「き、貴様、なにをしている？」

「いや、何って飯を食ってただけだけど、なあ桃香」

「はい、愛紗ちゃんもどうぞ、おいですよ」

「え、いや私はあまりお腹は・・・」

ギュルルルル~~~~~

「ノノノノこ、これは違います？そ、その・・・ノノノノ」

「えんりょうしなくてもいいんですよ、さどつぞ」

「じゃあ、お言葉に甘えて、いただきます」

パクパク、もぐもぐ、凄い勢いで食べてる

「お名前は？」

「わ、私は関羽、字は雲長、真名は愛紗です」

「愛紗さんね私は南葉、この子は凛と言います、娘の事は有難うございました」

「い、いえ」

「ところであなたお名前・・・」

「あ、皆いるな、じゃあ俺は鬼龍、字は和人、真名はない、あと俺は異世界から来たんだ」

この後、事情を説明した。

第八幕 真名ゝ前編ゝ（後書き）

書いてたら文が多くなったので、前半と後半にわけます

第九幕 真名、後編

┌ ┌ ┌ ┌ ┌
└ └ └ └ └

混乱している、まあ確かに異世界から来たって言うのもうそくさいしな

「異世界？それってどんなところなんですか？」

朱里が聞いてきた。

「うん、説明するのがむずかしいから手短に言っと……」

そこから手短かに事情を話した。

「言うわけ、わかった？」

「なんとなくはわかったけど……」

「それが本当ならすごいことなの？」

「たしかに、すごいことだね。」

「うむ、確かに手合わせした時も珍しい武器を持っていたし……」

星が俺の持っている武器をジロジロ見てきた

「たしかに見た事ない服を着ていますしね」

「確かに」

朱里と離里は服が気になるらしい

「あと、真名が無いと言つのはどう言つ事だ」

関羽が訪ねてきた

「ああ、説明する前に関羽、あんたの名前愛紗って呼んでもいいか？」

「え、ああ約束だな」

よし、じゃあ説明しよう

「真名は親からもらうんだろ？」

「ええ」桃香が答える

「俺がいた所は、真名は存在しなかったんだ、だから真名はないんだよ」

本当なんだよ

「あと、もうひとつ見せたいものがあるんだけど」

「なんだ？」

「なんですか？」

「なんなのだ？」

外はもう夜になっていた、月がきれいだ。

「で、なにをみせるんだ」星が聞いてきた。

「もうそろそろだと思っただけ・・・」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そして、体が光に包まれた。

「ああなるほど」ポンと手をたたいた。

「じゃあ、お風呂はどうするんですか？」桃香が聞いてきた

「え、うーん一応俺は男だったからな、男湯だろ」

「胸がおっきいのだ？」

おいおい、そこに目をやるか？普通、でもぬらりひょんに、出てくる淡島は

確かに胸が、おっとこれ以上言えねえわ。

「／／／こ、こら？鈴々、そんな事をきくな？／／／」愛紗が顔を赤らめながら鈴々を叱った

「愛紗よりも、大きいのだ？」

「余計な御世話だ？」愛紗が大声で怒鳴った、ちよつとは声の音量下げろよ、夜だぞ今。

「そもそも何の妖怪なんですか？」離里が聞いてきた。

「淡島っていう妖怪なんだけど」

「じゃあ、真名は淡島でいいんじゃないのか？」星が言ってきた

「そうだな、それでいつか、桃香達もそれでいいか？」

「いいんじゃないかな」

「それでいいと思うぞ」

「そ、それでいいのだ」なぜ泣きながら言っている鈴々よ

「私もそれがいいと思います」

「え、はわわわ、いいと思います」

皆が嬉しそうに言った、鈴々以外は。

「じゃあ今日から俺の真名は淡島だな、よろしく」

「「「「「「よろしく頼む（なのだ」（おねがいします）」」」」」

「」

この後俺は風呂に入り、早く寝た・・・

第九幕 真名〱後編〱（後書き）

どうも、今回は主人公の真名を決める話でしたけどいかがでしたでしょうか

途中、少し色気のようなものを入れましたが、まあ、どうでもいいですねはい。

第十幕 旅立ち・・・のはずが

「う~~~~ん、はあ」

いい天気だ、何かいい事がありそうだな

「淡島さん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

そこには朱里がいた。

「昨日は大変でしたね」

「まあな、でもあれで全部分かったからいいんじゃないのか？」

「そうですね」

朱里が小さく笑う。

「む、何だもう起きてたのか」

星が少し眠たそうにしながら、起きてきた。

「おう、おはよう」

「そうだ、いつ聞こうか思ってたんだが」

「ん？」

「これからお前の事をどう呼べばいいんだ？」

「どうって・・・鬼龍でもいいし真名で呼んでもいいけど」

「うむそうか、ではこれから和人と呼ぼう」

下の名前でか、まあ呼びやすいいいんじゃないね。

それからして、桃香達が起きてきた、桃香はなんだかボケているのか何回か柱に頭をぶつけていた。

「ふうー良く食べた」

「お口あつてよかった」

「有難うございます、何から何まで・・・」

南葉さんが俺たちが泊る所がなかったとき、家に泊めてもらったその南葉さんの娘が山賊達に襲われた所を、俺が助けてやった。

「このあとはどうするの？」

南葉さんの娘凜が聞いてきた

「この後は、南に行ってみたいと思います」

桃香が行く場所を示した。

「そうですね、またここを通った時はいつでもきてくださいね」

「有難うございます」

あれから少しして、ここから南に旅立つので食料などを調達してから出発することになった。

「よし、これだけでいいな」

「ああ、そうだな」

「少し荷物が多くなったのだ」

俺と愛紗、鈴々で食料の調達に来ていた、桃香と星、離里は別の買い物をしている。

「じゃあ、帰るか」

「そうだな、長くいては時間がないからな」

「そうですね」

帰ろうとした時、向こうから声が聞こえてきた。
なんだ？

「スマン、先に帰っててくれ」

「どうしたのだ？ なにかあるのか？」

「いや、ちよつとな・・・」

荷物を愛紗達に任せて、声がする方に行った。

そこには、俺が最初に会った山賊達が店を荒していた。

「やめてください？なにをするんですか？」

「へへへへ、じゃあ金を出しなそれで許してやる」

「そうだぞ、兄貴の言うとうりにしろ？」

「は、早くするんだな」

あいつら・・・前のやつで懲りてなかったのか

「おい、何やってんだ」

「ああ、なんだ・・・ってお前は？この前の？」

「おい、お前らこの前で懲りたんじゃねえのか？」

「へ、あんなんでへこたれるかよ」

「今回は許す気ねえからな・・・」

閻魔刀を一瞬で抜き、小柄な奴を斬った。

「……?」

「な、ないしやがる？」

「黙れ・・・」

さらにそのままエアトリックで兄貴の近くに行き、縦、横に切り捨てた。

「ぐあ………？」

「残るはお前か．．．」

「ひい？ゆ、許してくれだな？」

「だめだ、お前らは人を傷つけた」

デブの男を睨みつけ、体中に畏をあふれ出し

「鬼神の“鬼憑”完全なる父性——伊弉諾・・・」
そして・・・

「あ、やっと帰ってきたのだ」

「遅かったではないかなにをしていたんだ？」

「いや、何でもないのでお仕置きをしていただけた」

┐
┐
┐
┐
┐
┐
?
?
?
?
┐
┐
┐
┐
┐
┐

第十幕 旅立ち・・・のはずが（後書き）

どうも、今回も長くなってしまいました。
さて、やっと畏、戦いが出てきました
これから宜しく願います

第十一幕 旅

「では、これで」

「気お付けてくださいね」

「はい」

桃香があいさつを済ませ、村を出ようした

「あの？」

「ん？凜ちゃん何か用かな？」

何だろう？俺はそう思いながら振りかえった。

「これ・・・私が大事にしてたお守り、鬼龍さんにあげます」

「いいのか？大事にしてたんだろう？」

「いいんです、山賊から私を助けてくれたお礼です」

とても大事にしていたんだろうな、握ったあとが着いている。

「じゃな、元気だな」

そう言い残すと、俺たちは村を出て南に向かった。

「鈴々はお腹がすいたのだ」

「そうだな、もう少ししたら飯にしよう」

「そうですね、村を出てから歩きっぱなしですしね」

朱里と鈴々が腹をすかしていた。

「桃香達は大丈夫か？」

一応桃香と愛紗、星、離里にも聞いてみよう。

「私もお腹すいちゃった」

「そうだな、すこし早いが昼にしよう」

「うむ、賛成だ」

「そうですね」

全人賛成のようだ、じゃ飯にするか。

「どこでたべるのだ？」

鈴々が聞いてくる

「そうだな・・・お、あの木の陰で休もう」

そして、木の陰で昼飯を食べていた

「うまいな」

「そうですね」

「鈴々、よく噛んでから次を食べろよ」

「わかってるのだ」

「お、おいしいです」

「確かに」

皆つまそつにして食べている

「よし、そろそろ行くか」

昼を食べて少しした後、俺が言い張った。

歩き始めて数十分、桃香が話してきた。

「鬼龍さん、すこし寄って行きたい所があるんですけど・・・」

「ん、寄って行きたい所？どこにあるんだ？」

「このまままっすぐ行つた所にあるんですけど・・・」

「まあ、別にかまわないが、どうして？」

「え、それは・・・」

何かいいたくない事でもあるのか？まあいい

「おいしい桃香が寄りたい所があるらしいから、そこで宿を探してみよう」

「え、まあ構わんが、なぜ？」星が聞いてくる

「桃香が寄りたいんだとよ」

「桃香様、そこに行きたいのですか？」愛紗が訪ねてみる。

「コクン」言葉を言わずにうなずいた、気のせいかな少し桃香の様子が変な気がした

それからして、数十分後、桃香が来たかった所に来た、最初に見て思つた事

その一、土地が広く奥には城らしき建物があつた

その二、少し賑やかだが、なんだか明るくない

「なんですかここは？」朱里が聞いてきた

「わからない、桃香が来たかった場所なんだろう」

「向こうから誰か来るぞ」星が向こうから来る誰かを見た。

人影が見えると、今までにぎわっていた人たちが静かになった。

「どどど、どうしたんですか？急に静かになっちゃって」

離里が怖くなって俺の背中に隠れた。

「大丈夫か離里？怖いなら隠れてろ」

「フフフフ、やっときてくれましたね、待ちくたびれましたよ」

何だこいつ、見かけからして俺より少し年上の男が部下を引き連れやってきた。

「何者だ？」愛紗が謎の男に問いかけた。

「鈴々、星、桃香を守つとけ」俺が小さな声で二人に言った。

「うむわかった」

「了解なのだ」

「朱里こっちにこい」

「あわわわ、はい」

とりあえず、朱里と離里を街の人に預けてきた。

「よしこれでいいだろう、でアンタ誰だ？」

男は部下に耳打ちをしていた、なにをたくらんでは……

第十一幕 旅（後書き）

どうも、今回は・・・特にありません
次回はなんとか、戦いを書こうと思います
では、

第十二幕 謎の男

「おい貴様？何をしている？」愛紗が男に近寄ろうとした時

「なっ？何をする？」愛紗は男の部下に腕を掴まれた。

「愛紗？てめえ・・・」

「おっと、あなたには一旦眠ってもらいますよ」

男が何やら呪文を唱え始めた。

「なっ・・・なにを・・・」そのまま俺は前に倒れた

「鬼龍？なにを寝ている？離せ？離さぬか？」

愛紗が言っているが、ダメだ意識が・・・

「淡島さん？起きて下さい？」

「う・・・ここは・・・」

「き、鬼龍さんが私たちを預けた人の家です」

朱里と離里が悲しそうにしながら、言った。

桃香達の姿が見えない、どこに行った？

「桃香達は、どこにいる？」

「桃香様達は……」

「ワシが答えよう」

すると奥から一人の爺さんが出てきた。

「お主たちが一緒にいた者たちは、この先にある城に連れて行かれる」

城？この先にあつたあれか……でもなぜ

「あの城に住んでいる彼奴の名は左慈、そして于吉と言う男が住んでいる」

その者たちは突然現れ、村の女たちをほとんどを城に連れてゆきこき使っている。

もしはむかうな事をすれば、殺される」

「なんだ、そいつ強いのか」

「うむ、彼奴は呪文やさまざまな術を使って人を思い道理に動かせることができる」

思いど通りに・・・ん？じゃああの時、桃香を操っていたのか。

「で、桃香達はどうなる？」

「言う事を聞かない者は牢獄に入れられる、わしの妻もそこに連れて行かれたんじゃない」

そこで、頼む？お主らしいないんじゃない？妻を、おなご達を助けてくれ頼む？」

あいつら・・・何て事をしやがる・・・

そう思った俺は畏を体中にあふれ出し、怒りが頂点に達した。

「ああ、いいだろう助けてやる必ず」

「おお、ありがたや」

「朱里、離里おまえたちも来るか？桃香達を助けに」

二人はお互いの顔を見あって、

「「もちろん？」」

息のそろった返事で返してくる。

「じゃあ、早速いくぞ、左慈のいる城に」

そして俺たちは左慈のいる城の前に来た。

「朱里、離里お前たちは城に入った後牢獄を探して皆を助けるんだ途中まで一緒について行ってやるけど、後はお前たちの勇気を示す時だ」

「は、はい？頑張ります？」

よし、じゃあ行くか

そして俺は怒りを解き放って、

黒と赤が混ざった雷が空を埋め尽くし、

雷が体に直撃し、

武器、魔剣スパーダを手にして

畏を放ちながら、城の中に進んでいく

「待つとけよ、クソ野郎が」

第十二幕 謎の男（後書き）

いや、疲れました、今回はやっと覚醒状態になりました
次回は城に潜りこんだ鬼龍達は、牢獄を探すべく、城の中を調べる

第十三幕 探索

・星・

どこだ、ここは・・・

そこは薄暗い部屋、明かりが少し照っていた。

辺りを見ると、何人かの女性の姿があつた、さらに向こうから声が聞こえてきた。

「ふああああ、しかし左慈様も何を考えているのやら」

「そんな事知らねえよ、ここに来て街にいた女共を連れて来て何をするのか、しりたいねえ」

「おい？ここはどこだ？」

すかさず逃げようとしたが手と足がヒモで結ばれていて動けなかった。

「何だお前、もう起きたのか、ここがどこだか知りたいのか？」

右にいた男が言ってきた・・・ここにいるという事看守か・・・

「ここはだな、左慈様と于吉様つのが納めてんだよ、その二人はいろんな術を使えるんだよスゲエだろ」

じゃあ、あの時の男はこの城の主だったのか・・・

その前にここから抜け出して、愛紗達を見つけないと・・
(和人・・・お前はどこにいる・・)

・ 鬼龍・

「おらおらおら？殺されなかつたら道をあけるー？」

「なんだこいつ？早く討ち取らんか？はや・・」「じゃまだー？」ぎ
やあああ？」

なんかいたけど・・・気のせいかな。

「ま、待って下さい、早すぎますっ」

「淡島さん、待って下さい」

朱里と離里がハア、ハアと息をもらしながら頑張っ
て付いてきている。

頑張れ？朱里、離里もう少しだ(多分・・・)

「おっとなんと、さてここから桃香達を探すか？」

「ま、待って下さい、す、少し休ませて……」

「そ、そうです……少し……休ませて……」

なんか疲れてるけど、そんなに早く走ったかな？

「とりあえず、ここからは二手に分かれて探すぞ」

「「はい」」

「ふう〜ここにもいないか」

あれから朱里と離里と別れて色々と部屋を探しているが見つからない。

あと、武器もスパードから閻魔刀に変わっていた。
覚醒の効果が切れたらしい、まっいつか。

「この部屋は何だろう？」

恐る恐るドアをあけた、目に飛び込んだのは

「……………」

ボタン？…………気のせいだよな？

もう一度ドアを開けた。

「なんじゃ、一旦閉めおつて」

「なんであんたがいるんだ」

そこにいたのは、死んだ俺をこの世界に送り込んだ爺さんがいた。

「まったく、言葉づかいの悪い奴じゃな、年よりには優しくせんか」

「で、なんのようなんだ？」

「そうじゃったな、お主ここにおる女達を助けようとしとるようじやが

なぜたすけるのじゃ？」

「なぜって・・・助けるためだから」

「命に変えてもか？」

「え・・・まあ」

「うむ、ではお主にこれを授けよう」

そう言つと爺さんが何やらブツブツ言っているがなんだ？

そして爺さんが「ハッ？」と言つた瞬間腕が火に包まれて新たな籠手が腕に

くつついていた、これは・・・

「どうじゃ、おどろいたか？その籠手はイフリート、お主も知つておろつ。

さらに、フォースの力を入れておいたかのう、フォースはフォース

でも少し違う

工夫をしておいた」

イフリート・・・確かデビル1で。。。が使っていた炎の籠手だったな

「このフォースは指定した人物を引きよせたり、吹き飛ばしたりできるんじゃない
あと普通に手を触れずに物を動かすこともできるんじゃない、どうじゃ
凄いじゃろ」

「ふゝん分かった」

「じゃあ、またのう」

新たにイフリートが手に入ったけど・・・まあ役に立たせてもらうよ
フォースの力も手に入った事だし。

「よし、探すか」

第十三幕 探索（後書き）

なんと今回は新たにイフリートとフォースを入れちゃいました？
ウヒョヒョ、スイマセン笑っちゃいました。

第十四幕 お知らせ

え〜どうも、bigboosです

今回は少し訂正したい所があります

第十三幕で鬼龍が最後の方に

イフリートの箆手とフォースの力が

手に入りりましたが、イフリートの箆手が

手に入った事をなしにしてください？

後から思っ たんですけど、「ベオウルフがあるから

べつにイフリートはいらねえじゃん」

と思いました、そして無茶なことにもう一つ

思いついたことが、（もうめんどくさいからイフリートの技

を、ベオウルフで出来るようにしよう）

と考えました、なのでベオウルフでデビルシリーズの箆手の技

をなんでもだせるようにします（無茶です）

フォースの力は使えるようにします

では、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641y/>

恋姫無双～龍の如く～

2011年12月5日19時03分発行